

マルコによる福音書 10 章 13 節～22 節

2017 年 4 月 27 日

古本 靖久

1、聖歌 277 番 「幼子を 抱き上げ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 81 ページ）

4、テキストの位置

ユダヤに入られたイエス様は、律法についてファリサイ派の人々と問答したあと、弟子たちに教えていきます。そしてこれらの教えは、具体的なものでした。

十字架につけられるためにエルサレムへの道を進む今でも、相変わらず無理解な弟子たちの姿がみられます。しかしイエス様はここでも辛抱強く、弟子たちを教えるのです。

ユダヤへ	10:1-12	律法のとらえ方
	10:13-16	子どもを来させる
	10:17-22	金持ちの男
	10:23-31	神の国に入るには
	10:32-34	第三回受難予告
	10:35-45	仕える者として
	10:46-52	目が見える

5、節ごとに

◆子どもを来させる

10:13 （そして）イエス（彼）に触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。
（しかし）弟子たちはこの人々（彼ら）を叱った。

イエス様の元に子どもが連れて来られます。子どもたちが誰に連れて来られたのか、またどうして連れて来られたか、詳しいことは何も書かれていません。

弟子たちはこの子どもたちを連れてきた人々を叱ったのでしょうか。それとも子どもたちを叱ったのでしょうか。文法的にはどちらとも取れます（新共同訳は人々としています）。教師であるイエス様の邪魔をすることを、許すわけにはいかなかったのでしょうか。

10:14 しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい（るままにしなさい）。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである（だから）。

9章33～37節でイエス様は、一人の子どもの手を取って弟子たちの真ん中に立たせ、抱き上げて「わたしの名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」と言われたばかりです。その言葉を覚えていたら、イエス様のこの反応は予想できたでしょう。



「憤った」という言葉は、大変強い怒りを示します。いつまでも排他的な考えの弟子たちが許せなかったのでしょう。ここまで感情を表に出すイエス様に違和感を覚えたのか、マタイとルカ両福音書では「憤る」という語が削除されています。しかし**本来のイエス様は、それほどの強い怒りを感じておられた**のです。

ここで子どもたちに対する考え方をおさらいしておきたいと思います。当時のユダヤにおいては、子どもは数のうちに入っていませんでした。人格など認められておらず、律法を学ぶことすらできない、何もできない存在として扱われていました。

したがってこの場面から、「子どものように純粋でなければ」とか、「子どものように清い心を持って」というように解釈するのは困難です。それよりも**自分たちに与えられる恵みに頼らなければ生きていけない者のために、神の国はあるのだ**と捉えた方がよいでしょう。

10:15 はっきり（アーメン、わたしは）あなたがたに言う（う）。（神の国を）子供（を受け入れる）のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

マタイ福音書ではこの部分を、「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」と書き換えます。しかしマルコ福音書では、子どもを受け入れずに追い払おうとした弟子たちに対して、「子どもを受け入れなさい」と言われています。

子どもを受け入れることと、神の国を受け入れることは同じことなのです。自分の目には小さな存在、価値のないような者を受け入れることこそ、神の国を受け入れることになるのです。

9章37節の「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」というイエス様の言葉が、ここでも思い起こされます。

10:16 そして、子供たちを（腕で）抱き上げ、（その上に両）手を置いて祝福された。

現在桃山基督教会の聖餐式の中では、洗礼を受けていない方や子どもたちに対して祝福の祈りをささげています。頭に手を置いてお祈りしていますが、手を置いた瞬間に泣き出したり逃げ出そうとしたりする赤ちゃんもいて、とても困ります（周りは和みますが）。

葡萄の樹を読んでいくと、1977年に聖餐式の陪餐のときに子どもが前にきたら、司祭は祝福をするようにしたという記述がありました。イエス様が開始したこの祝福の祈りですが、マタイとルカには記されていません。祝福とは、選ばれた者だけが受けることのできるものだという考え方があったのかもしれない。

<ここまでの箇所から>

イエス様が子どもを祝福している場面を読むと、自分も子どものようにならなくては、と思うかもしれません。しかし自分の生き方を変えないと恵みをいただけないというのであれば、果たしてどれだけの人が神の国に入れるのでしょうか。

イエス様がここで伝えようとされたこと。それは神の国とは、子どものように小さく、弱い者のためにあるということです。自分の力で何も得ることが出来ず、ただ求めることしかできない者のために、神の国は用意されているということです。

だからイエス様は弟子たちに言われるのです。「そのように選ばれた子どもたちを、あなたたちは排除するのか。それならば神の国も、あなたたちの手から離れる」と。

わたしたちは周りにいる小さくされた人々に対して、目を向けているのでしょうか。一緒に歩こうとしていますか。

◆金持ちの男

10:17 （そして）イエス（彼）が蕪（道）に出ようとされる（て行く）と、ある（一人の）人が走り寄って、ひざまずいて（彼に）尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」

続いてイエス様は、一人の人に出会います。彼は走り寄って、イエス様の元に来ました。この描写は、彼の熱心さをあらわします。またひざまずくという姿勢も、教師に対して取るべき態度として捉えることが出来ます。つまり彼は、イエス様を試したり、陥れるために来たものではありません。教えを乞いに、やって来たのでした。

10:18 (しかし) イエスは(彼に) 言われた。「なぜ、わたしを『善い(者)』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。

イエス様は彼の呼びかけに対して異論を唱えます。普通だったら「善い先生」と呼ばれたら、嬉しくなってしまいます。すぐに何でも教えてあげたいと思うのは、わたしだけでしょうか。

しかしイエス様はその言い方を拒絶しました。「善い」と呼ばれる方は、神さま以外にはならないというのです。わたしたちは神さまの子どもとしてのイエス様像をすぐに頭に描いてしまいますが、マルコ福音書はあくまでも人間としてわたしたちに関わっていかれたイエス様の生涯を描きます。

イエス様は徹底的に神さまのみ心に従い、十字架へと向かわれました。イエス様にとって、善い方は神さまただ一人だったのです。

10:19 『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」

意気込んで、永遠の命に至る道を聞きに来た人に、イエスさまは昔から与えられてきた戒めを指し示します。この戒めは十戒の後半部分です。

出エジプト記にはこのようにあります。

あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。

殺してはならない。

姦淫してはならない。

盗んではならない。

隣人に関して偽証してはならない。

隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。

ユダヤの人は、この戒めを一生懸命守ってきました。なぜならば十戒を守ることは、神さまがユダヤ人を守ってくれるということの、交換条件だったからです。そしてその掟を守ることによって、神さまの前に立てる者になれると信じていました。



10:20 すると彼は（彼に）、「先生、そういうことはみな、子供の（小さい）時から守ってきました」と言った。

彼のようなユダヤ人のほとんどは、このように思っていたことでしょう。自分は罪を犯していない、そう固く信じていたのです。

しかし彼はイエス様の元に、教えを求めてやってきました。彼は他の人がやっているのと同じことをしても、永遠の命を得ることができないと思ったのかもしれませんが、特別な何かを求めて、彼はやって来たのです。十戒なら知っているし、守っている。それが彼の答えでした。

10:21 （しかし）イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って（自分の）持っている物を売り払い、貧しい人々に施し（与え）なさい。そうすれば、（あなたは）天に富（宝）を積む（持つ）ことになる（だろう）。それから、わたしに従いなさい。」

イエス様は彼を見つめ、慈しみます。イエス様の深い同情の気持ちが、ここにはあります。イエス様のまなざしからは、彼を助け、救いに招き入れたいという思いがくみ取れます。

イエス様が彼に勧めた行動はこのようなものでした。

「行きなさい」、「売ちなさい」、「与えなさい」、「来て従いなさい」。

つまり自分の財産のあるところに行き、それらを手放してから一緒に来なさいということです。聖書には漁の舟や収税所の机、両親や宗教的な先入観まで、様々なものを放棄した人の姿が出てきます。イエス様は彼にも、そのようになることを求めました。

10:22 （しかし）その人はこの言葉に（対し）気を落とす（顔を曇らせ）、悲しみながら立ち去った。（なぜなら）たくさんの財産を持っていたからである。

彼は、悲しみの中で立ち去るしかありませんでした。彼はたくさんの財産を持っていたため、イエス様に従うことをためらってしまいました。

しかしこの頃の社会において、金持ちは自分がまっとうに働いて得る以上の収入を手にしていました。違う見方をすると、彼の所持している財産の多くは不当に得たものであって、本来その人に属するものではないのかもしれませんが、だからそのような財産は、貧しい人に与えてしまいなさいとされているのです。

<今日の箇所から>

人は財産を手放すことがなかなかできません。それは何故でしょうか。財産に頼るからです。その財産にしがみついていたら、豊かな暮らしが保証されていると考えるからです。

しかしイエス様は、財産から手を離すようにと言われます。何もかも失ったときに、頼れるものは何でしょうか。それが神さまなのではないでしょうか。

前半の子どもを祝福するという記事も、後半の金持ちの男の話も、ポイントは「神さまに頼る（神さまにしか頼れない）者に、神の国は与えられる」ということだと思います。

さて、この金持ちの男はこれから先、どうなったのでしょうか。きっと顔を曇らせて家に帰ったあと、ずっとイエス様の言葉を思い返していたでしょう。そしてイエス様がエルサレムに入り、十字架につけられたという噂が彼の耳にも入ってきたかもしれません。

そして彼の元に復活のイエス様が来たときに、彼の心は神さまの方へと向けられるのではないのでしょうか。そのときに初めて、財産なんかはどうでもよいという気持ちが生まれ、心から神さまに頼ることが出来るのだと思います。

わたしたちにも経験があるのではないのでしょうか。イエス様を信じたときに、それまでの価値観がまったく変わってしまったということが、それまで大切にしていたものがどうでもよくなり、神さまにすべてを委ねる喜びが何にも増していくことが。

結果的に捨てる、結果的に手放してしまう。イエス様に従ったときに、わたしたちはそのように変えられるのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は5月25日(木)10時30分からです。「神の国に入るには」、「第三回受難予告」(マルコ10:23~34)について学んでいきます。

